

## 呑川レポート2010-3号 防潮堤耐震補強工事始まる

いつも呑川上流から蒲田付近くらいまでしかウォッチングしない私ですが、久しぶりに河口付近まで出かけました。

すると、「夫婦橋公園」には入れません。



「夫婦橋公園」は大きなクレーン車に占拠され、特大の土のうをたくさん作って、運搬船に乗せています。

そして、その先には・・・



これまた大きな作業船が置かれ、クレーンが矢板鋼板を持ち上げているのが見えます。いったい何をしているのでしょうか・・・？

実は、夫婦橋下流域の「防潮堤・耐震補強工事」が始まったのです。

この地域は、「防潮堤」としての基本的な機能「高潮対策」は完成しています。戦後最大といわれる「伊勢湾台風」並の大潮が来ても、洪水を起こさない護岸の高さがあります。おかげで、護岸は人間の背の高さより高く、そばを歩いても呑川を見ることが出来ません。

しかし、大潮対策が完成しても、この地域には困った問題があります。この地域全体は多摩川が作った扇状地で、護岸の下は砂地といってもいい地盤なのです。これでは、大地震が起きたとき、「液状化現象」が起きて、防潮堤そのものが倒れる心配があるのです。



工事はまずクレーンで持ち上げた矢板鋼板を、呑川護岸沿いに打ち込みます。写真には、並んだ矢板鋼板の上に、青い機械が乗っていますが、これは呑川に鋼板を打ち込む「圧入装置」です。

こうして矢板鋼板の柵を作った後、「夫婦橋公園」で作った特大土のうを並べ、川の水を排除して、砂状地盤の地盤改良を行います。

地盤改良の方法は、「活性シリカ」を注入したり、固化剤などを注入して行います。これは、近年よく報道されている「液状化対策」と同じ手法です。



また呑川沿いには、住民にとってなくてはならない「生活道路」があります。今回の工事は、大地震の時に「生活道路の確保」という目的もあります。

大田区の海側に近い地域は、どこでも大地震の時に「液状化現象」を起こす可能性があります。

日本では、地震時にあちこちで「液状化現象」の被害が起きています。

地域全体を地盤改良することは不可能ですから、外国のように、本来なら「住んではいけない地域」

として指定しなければならず、そこに住む場合には行政が責任を取らないという確認書が取り交わされる国もあります。

しかし、東京では、江戸幕府開びやく以来、無理矢理住まわせる政策さえ採られました。

さて、一般に多摩川が作った扇状地は、下流に行けば行くほど、砂層は厚くなります。ですから呑川も、ここ「夫婦橋」付近よりさらに下り、「宝来橋」より下流になると、この砂層は呑川の河床にまで現れるようになります。

そこで、この耐震補強工事の次の段階は、最下流地域の河床をコンクリートで補強することが予定されています。

昨年、私のレポートはほとんど「生きもの」に集中してきましたが、時間の許す限り、すこしウイングを広げて、幅広い視点の報告が出来れば・・・と思っています。

— from —

高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) [mitsuo.takahashi@nifty.com](mailto:mitsuo.takahashi@nifty.com)